

東南アジア史学会会報 No.11

昭和45年1月31日

第7回大会報告

東南アジア史学会恒例の秋季大会は、昭和44年11月10日(月)上智大学上智会館において開催され、そのプログラムは次の通りであった。(敬称略)

開会のあいさつ

白鳥芳郎

午前

後漢時代の武陵蛮について

谷口康男

マライ人における自治心理の基調

築島謙三

鄭氏残党の南ベトナム移住について

陳荆和

午後

ビルマ学界の趨勢について

大野徹

阮興における志怪と伝奇

川本邦衛

東南アジアのイスラム化における港市の役割

長岡新治郎

閉会のあいさつ

山本達郎

会員総会

懇親会

<発表要旨>

後漢時代の武陵蛮について

谷口房男

華南の地域には早くから漢族と異なる諸族が居住していた。この地域に居住する諸族を漢文史料では蛮と呼んでいる。

ところで、漢族がこの地域へ進出・発展するに伴って、原住の諸族との間にさまざまな問題が

生じてきた。

ここでは後漢時代における華南地域の諸蛮族について、とくに武陵蛮を中心として、その種族の起源および漢族とのかかわりをとりあげてみていった。

なおこうした問題をみていく上で、①史料の不足、②従来の研究が立ちおくれていることなどを指摘される。このような欠陥を補なう試みとして、後漢時代における蛮族の反乱とその原因とをみていく中で、①漢族の南方への進出・発展過程 ②蛮族の生活形態 ③蛮族の漢化過程などを明らかにする手懸としたい。

そこでまず、武陵蛮の種族関係と呼称・居地についてのべ、ついで後漢時代における武陵蛮を中心とした蛮族の反乱の月別・季節別回数およびその規模や原因についてみた。

蛮が反乱を起す原因是、史料に明記されたものとして、①税の過重に対する不満であり、②周辺の漢人流賊の寇暴に呼応または連合しての二点であった。しかし、こうした史料に明記された蛮の反乱原因のみでは、秋・冬季に集中している蛮の反乱回数を充分に説明し得るものとは考えられない。

そこで蛮の反乱の原因を他にも求める必要がある。すなわち、③蛮の生活形態（生業形態を含む）、④蛮と漢族との接触とが深く結びついて蛮の反乱が起ったのである。③・④について少し具体的にのべるならば、③は彼らの生活は自然採集が主で、それ故に冬期の飢餓に備えて秋・冬期に漢人農耕民を襲い略奪を加えたのである。④は漢族の南方への進出・発展は蛮の生活基盤に対する侵入・圧迫であり、それへの反抗として反乱を起したのである。

こうした蛮族の反乱の原因を検討していく中から、蛮族の生活形態およびその漢化過程などについてふれてきた。

とくに漢族の華南地域への進出・発展に伴って、原住民である蛮族の一部は、漢族と同居して農耕を営み、次第に漢化していった。また一部は、漢族の侵入・圧迫によって生活の基盤を失いそれに反抗しながらも大山窮谷に逃れて、自然採集または焼畑耕作などを営むきわめて原始的な生活形態を持続していった。こうした蛮族の分化は、その後ますます拡大していくこととなった。

マレー人における自治心理の基調

築島謙三

英國は、19世紀はじめマラヤ内部に干渉をはじめ、その勢力の安定をはかるためペラ王國

生じてきた。

ここでは後漢時代における華南地域の諸蛮族について、とくに武陵蛮を中心として、その種族の起源および漢族とのかかわりあいをとりあげてみていった。

なおこうした問題をみていく上で、①史料の不足、②従来の研究が立ちおくれていることなどを指摘される。このような欠陥を補なう試みとして、後漢時代における蛮族の反乱とその原因とをみていく中で、①漢族の南方への進出・発展過程 ②蛮族の生活形態 ③蛮族の漢化過程などを明らかにする手懸としたい。

そこでまず、武陵蛮の種族関係と呼称・居地についてのべ、ついで後漢時代における武陵蛮を中心とした蛮族の反乱の月別・季節別回数およびその規模や原因についてみた。

蛮が反乱を起す原因是、史料に明記されたものとして、①税の過重に対する不満であり、②周辺の漢人流賊の寇暴に呼応または連合しての二点であった。しかし、こうした史料に明記された蛮の反乱原因のみでは、秋・冬季に集中している蛮の反乱回数を充分に説明し得るものとは考えられない。

そこで蛮の反乱の原因を他にも求める必要がある。すなわち、③蛮の生活形態（生業形態を含む）、④蛮と漢族との接触とが深く結びついて蛮の反乱が起ったのである。③・④について少し具体的にのべるならば、③は彼らの生活は自然採集が主で、それ故に冬期の飢餓に備えて秋・冬期に漢人農耕民を襲い略奪を加えたのである。④は漢族の南方への進出・発展は蛮の生活基盤に対する侵入・圧迫であり、それへの反抗として反乱を起したのである。

こうした蛮族の反乱の原因を検討していく中から、蛮族の生活形態およびその漢化過程などについてふれてきた。

とくに漢族の華南地域への進出・発展に伴って、原住民である蛮族の一部は、漢族と同居して農耕を営み、次第に漢化していった。また一部は、漢族の侵入・圧迫によって生活の基盤を失いそれに反抗しながらも大山窮谷に逃れて、自然採集または焼畑耕作などを営むきわめて原始的な生活形態を持続していった。こうした蛮族の分化は、その後ますます拡大していくこととなった。

マレー人における自治心理の基調

築島謙三

英國は、19世紀はじめマラヤ内部に干渉をはじめ、その勢力の安定をはかるためペラ王國

マレー人指導者との間に Pangkor 協約を結んだが、その中に「マレー人の宗教と慣習には干渉しない」という条項をいれた。他の王国と協約を結ぶ毎にその点は同様であった。これによって宗教と慣習の保護者の立場にあったサルタンは守られることになったといえよう。マレー人は、英國人の支配下にサルタン中心の伝統を維持することのできるその保証をとりつけたのであり、英國は自分らにとって保護者以上のものではないという意識をもつことになるのであった。

第 2 次大戦直後の英國のマラヤ支配の形式の変更は、結局、パンコル協約の中の上の条項の否認を意味し、それに対するマレー人の怒りははげしく、英國はその変更を撤回せざるを得なかつた。主権者としてのサルタンを認め、したがつてマレー人は非マレー人に優越するという以前の英國の基本方針は、あらたに誕生した The Federation of Malaya(1948・2・1) の憲法の骨子となり、その成立(1957・8・31)。それが拡大した Malaysia の成立(1963・9・16)に際してもそのことに変りはなく、それは憲法の中に明記された。現実にマレー人は他民族に対して優位にあるが、繁栄する他民族と同じ国民としているなかでは、おのずからその優位の意識は強まらざるを得ない。

このような心理を生じさせている自治の旧方式および経済的劣位は、歴史的に遠く社会的に深く根ざしているだけに、その心理の発揮する力は臨機に大きくなるのである。とりわけ中国人系住民に対する心理的抗争はときにはげしく燃えさかり、1964 年以来こんにちまで大規模の争乱が 3 度も起っている。このようであるから為政者はつねに国民統合には細心の注意を払うのである。昨年の国民統合の週間(Solidarity Week)は Rahman 首相の誕生日の 2 月 8 日にはじまったが、そのとき同首相は次のように語った。「インドネシアとの紛争は終った。しかしマレーシア内の主要共同体の間の国民的一致と和解および妥協の精神の必要は減じてはいない。……統合週間の目的は理解の拡大である。それは、政府当局者がそれがためにささげる時間と精力とに十分値する仕事である。」そしてこの週間のテーマは「一致」(Unity)であった。国民としての一致、諸民族間の調和は現実に必要であるが、他方マレー人における自治上の心理は牢固として上にのべたようなことがある。前者を強調することは後者の唱者の意に添わず、後者の強調は非マレー人の不満を増大させる。両者の間をいかに調合させていくかは理論的にも実際的にも容易であるとはいはず、ことにマレー人為政者には困難かつ切実な課題といえよう。後者の唱者層の反撥に対して現首相は次のように答えざるを得なかつたのである。

「国家と州の憲法上の長はマレー人であるサルタンであり、回教が公の宗教、マレー語が公用語であつて、かく憲法によってマレー人中心の国民になつてゐる。憲法はマレー人の権利を

守るが、同時に非マレー人の利権をも守るのである。したがってマレーシア人の銘々が国内の平和と安全を守るために憲法を尊重し、それを誇りとしなければならない。」— 1969.9. ,
Kota Bharu にて。

台湾鄭氏残党の南ヴェトナム移住について

陳 荆 和

(1) 大南寔錄前編及び其他の阮朝史籍に見える明将竜門總兵楊彥迪、副將黃進、高雷簾總兵陳上川、副將陳安平等が兵三千余人、戰船五十余艘を率いて、中部ヴェトナムを支配する阮主（阮福瀬、即ち賢主、1648-87）に帰投して、その命によって東浦地方（当時のカムボジア東南部）に入植したとの記事は、実は台湾鄭氏配下の楊彥迪（楊二）の率いる礼武鎮水軍を中心とした東寧政権の殘存部隊の南下を指すものであって、その南下の目的は多分に鄭克塽のカムボジア亡命を準備するためのものと推察され、東浦（美湫及び辺和）に入植した年代も1682年末から1683年5月にかけての時期であり、寔錄前編に見える賢主（己未31年（1679）正月ではない。

(2) 南下の鄭氏残党（俗に竜門部隊と称す）は阮主のバックするカムボジア二王の匿歎に味方して、シャムの擁護する正王匿秋に敵対するが、1685年初めには黃進によって楊彥迪が殺害される。義主（1687-91）は黃進の自主的傾向を放置出来ず、一枚万竜を主將とする討伐軍を南下せしめ、1689年3月ごろ、外匡郎（前江河口）にて策略を用いて黃進を倒し、阮軍は正王の据る幽東（Oudong）に進撃する。黃進失脚のあと、陳上川が竜門部隊の主將となって阮府に協力するが、カムボジア側の和平工作で阮軍は作戦目的を達しないまま1690年撤退する。しかし陳上川の竜門部隊は獨力を以て工代馬（前江河口の Cou Tau Heas）を守り、阮軍のための橋頭堡を確保する。その実力は大船6,7艘に人数4,5百名と云うところ。

(3) 明主は1698年、カムボジアに於ける勢力の失墜を挽回すべく、阮有鏡派をして正王に阮府に対する朝貢の恢復を要求するが、拒絶されたため、二年后（1700）、阮有鏡が主將となって遠征軍が南下する。この際陳上川は阮府水軍の大將として南榮（Phnom Penh）を占領するが、主將阮有鏡の陣歿により、阮軍は退いて、柴棍（Saigon）、辺和及び婆地（Baria）を占領することとなり、阮府はこの占領地に嘉定府を設置、福隆、新平の二県と鎮辺、藩鎮の二邑を附屬せしめ、別に清河、明香の二社を設けて、鎮辺と藩鎮に居留する華商と華僑を収容した。これが有名な嘉定府の設立であって、阮府がカムボジアの土地に設置した最初の行政、軍事組織である。その設置年代は1700年が正しく、寔錄前編の1698年ではない。

守るが、同時に非マレー人の利権をも守るのである。したがってマレーシア人の銘々が国内の平和と安全を守るために憲法を尊重し、それを誇りとしなければならない。」— 1969.9. ,
Kota Bharu にて。

台湾鄭氏残党の南ヴェトナム移住について

陳 荆 和

(1) 大南寔錄前編及び其他の阮朝史籍に見える明将竜門總兵楊彥迪、副將黃進、高雷簾總兵陳上川、副將陳安平等が兵三千余人、戰船五十余艘を率いて、中部ヴェトナムを支配する阮主（阮福瀬、即ち賢主、1648-87）に帰投して、その命によって東浦地方（当時のカムボジア東南部）に入植したとの記事は、実は台湾鄭氏配下の楊彥迪（楊二）の率いる礼武鎮水軍を中心とした東寧政権の殘存部隊の南下を指すものであって、その南下の目的は多分に鄭克塽のカムボジア亡命を準備するためのものと推察され、東浦（美湫及び辺和）に入植した年代も1682年末から1683年5月にかけての時期であり、寔錄前編に見える賢主（己未31年（1679）正月ではない。

(2) 南下の鄭氏残党（俗に竜門部隊と称す）は阮主のバックするカムボジア二王の匿歎に味方して、シャムの擁護する正王匿秋に敵対するが、1685年初めには黃進によって楊彥迪が殺害される。義主（1687-91）は黃進の自主的傾向を放置出来ず、一枚万竜を主將とする討伐軍を南下せしめ、1689年3月ごろ、外匡郎（前江河口）にて策略を用いて黃進を倒し、阮軍は正王の据る幽東（Oudong）に進撃する。黃進失脚のあと、陳上川が竜門部隊の主將となって阮府に協力するが、カムボジア側の和平工作で阮軍は作戦目的を達しないまま1690年撤退する。しかし陳上川の竜門部隊は獨力を以て工代馬（前江河口の Cou Tau Heas）を守り、阮軍のための橋頭堡を確保する。その実力は大船6,7艘に人数4,5百名と云うところ。

(3) 明主は1698年、カムボジアに於ける勢力の失墜を挽回すべく、阮有鏡派をして正王に阮府に対する朝貢の恢復を要求するが、拒絶されたため、二年后（1700）、阮有鏡が主將となって遠征軍が南下する。この際陳上川は阮府水軍の大將として南榮（Phnom Penh）を占領するが、主將阮有鏡の陣歿により、阮軍は退いて、柴棍（Saigon）、辺和及び婆地（Baria）を占領することとなり、阮府はこの占領地に嘉定府を設置、福隆、新平の二県と鎮辺、藩鎮の二邑を附屬せしめ、別に清河、明香の二社を設けて、鎮辺と藩鎮に居留する華商と華僑を収容した。これが有名な嘉定府の設立であって、阮府がカムボジアの土地に設置した最初の行政、軍事組織である。その設置年代は1700年が正しく、寔錄前編の1698年ではない。

(4). 嘉定府設立の際、陳上川は鎮辺營の総兵に任せられ、1714年には藩鎮の都督に昇進しているが、1715年5月頃病死する。陳上川の功績は阮府に対する協力、赫々たる戦功以外に、辺和及び柴棍両都市の建設者として重視せねばならぬ。柴棍がほど今日のショロンに当り、南越華橋及び商業活動の大中心なることを想起すれば、南越の経済基礎は陳上川配下の竜門部隊の手によって始められたと云って過言ではない。

(5). 陳上川卒後、その子の陳大定が竜門部隊の指揮をとり、引き続き阮府に協力する。しかし中傷に会って、1733年初、広南で獄死する。この悲劇のあと、陳大定の子、大力は母とともに、河仙に参り、母方の叔父である河仙都督鄭天賜に頼り、のちに、大力は河仙勝水隊の該隊として活躍する。陳大定の獄死により、竜門部隊は解散せられ、こうに、50年に亘る活動の幕を閉じることとなった。

(6). 竜門部隊は阮府の軍隊には編入されず、阮府の傭兵でもなく、所謂「外人部隊」でもなく要するに楊彥迪や陳上川に率いられた移民の自衛的武装集団であって、自己存続のため、阮府の駆使するに甘んじ、カムボヂヤやシャムの軍隊と戦った。その性格はのちの西山政権に協力した李才の和義軍や李阿集（集亭）の忠義軍に似ている。

(7). 年代から云っても、阮主の南北戦争は1673年春を以て終結し、瀕江を界として南北長期停戦の時期に入り、阮主としては今まで蓄積されていた戦力をを利用して南方に発展する机運になっていた。かかる機運があったからこそ、台湾鄭氏残党の移民集団は阮府に受容されたのであり、彼らの利用価値もそこにあった。賢主がかれらをカムボヂアに入植せしめたのは東浦地方の開拓よりも正王匿秋及びその背後にあるシャム勢力に対抗せしめるのが本当の目的であると見るべきである。この点、この移民集団がヴェトナム人の南進に極めて重要な貢献をなしたことは疑いない。しかし阮府の彼らに対する態度は極めて冷酷にして現実的であり、極力その人力、戦力は利用するが、かれらに自立的傾向があると直ちにこれを排除した。その点、同じく阮主配下である河仙に対する態度とは大いに異なる。河仙は鄭玖・鄭天賜親子に自立政権の存立を許したのに反して、竜門部隊にはこれを許さなかった。これは矢張り、政治的、戦略的原因によるもので、阮主はカムボヂア東南地区（つまり、嘉定府、今の南ヴェトナム東南部）では“Greater Vietnam”的実現を期したので、こうに異質的な政権の出現を許さず、これに反して、河仙はシャム、カムボジア、阮府三勢力の交接する地点にあり、その国際性格は強く、阮府としてはこれをシャムに対する緩衝地区として利用したかったからであろう。

(8). 史料利用の面から云えば、拙考を通じて、越南近世史の研究にとって基本史料である寔錄

前編の年代に関する記載に可成りあいまいな個處のあることが認められ、そのまま鵜呑みに受取れないことが痛感された。即ち、17、8世紀の阮主時代史を研究する場合、中国史料及び歐文史料との厳密な参照と勘考は不可欠であり、特に政治的立場や宗教的偏見にとらわれない同時代の中国商売の実見に基く華夷変態の如き邦文史料の利用価値は極めて高いと云はねばならぬ。

ビルマ学会の趨勢について

大野 徹

ビルマにおける学術研究の現状を、1) 大学、2) 学会の二部に分けて御報告申し上げたい。

1) 大学

従来、ビルマには二つの総合大学があった。一つはラングーン、もう一つはマンダレーである。ラングーン大学は、1878年カルカッタ大学の予科として発足、1920年に大学に昇格した。マンダレー大学は、1925年ラングーン大学の予科として設置され、1958年総合大学になった。この両大学のほかに、モールメン、バティン、マグウェー、タウンジー、ミッチーナーの5予科大学があった。

1962年登場した革命政府は大学制度の改革を行い、1964年新制度に基く大学が誕生した。新制大学の理念は、「大学教育法」によれば、1) ビルマ式社会主義国家の建設に参加する知識人の育成、2) 社会主義制度確立に寄与し得る研究活動の二点にある。

こうして、現在ビルマには、次の19の大学が設置されている。これら単科大学の大部分は、旧制大学の学部が独立したものである。

大 学 名	所 在 地	学 長	年限
1) ラングーン第一医科大学	ラングーン	ウー・バタン	7年
2) ラングーン第二医科大学	ミンガラートン	ウー・エー	7年
3) マンダレー医科大学	マンダレー	ウー・マウンマウンジー	7年
4) 歯 科 大 学	ラングーン	ウー・アウンタン	6年
5) 薬 科 大 学	ラングーン		
6) 工 業 大 学	ラングーン	ウー・ヨンモウ	6年
7) 経 済 大 学	ラングーン	ウー・エーフライン	4年
8) 教 育 大 学	ラングーン	サンミイン中佐	5年

前編の年代に関する記載に可成りあいまいな個處のあることが認められ、そのまま鵜呑みに受取れないことが痛感された。即ち、17、8世紀の阮主時代史を研究する場合、中国史料及び歐文史料との厳密な参照と勘考は不可欠であり、特に政治的立場や宗教的偏見にとらわれない同時代の中国商売の実見に基く華夷変態の如き邦文史料の利用価値は極めて高いと云はねばならぬ。

ビルマ学会の趨勢について

大野 徹

ビルマにおける学術研究の現状を、1) 大学、2) 学会の二部に分けて御報告申し上げたい。

1) 大学

従来、ビルマには二つの総合大学があった。一つはラングーン、もう一つはマンダレーである。ラングーン大学は、1878年カルカッタ大学の予科として発足、1920年に大学に昇格した。マンダレー大学は、1925年ラングーン大学の予科として設置され、1958年総合大学になった。この両大学のほかに、モールメン、バティン、マグウェー、タウンジー、ミッチーナーの5予科大学があった。

1962年登場した革命政府は大学制度の改革を行い、1964年新制度に基く大学が誕生した。新制大学の理念は、「大学教育法」によれば、1) ビルマ式社会主義国家の建設に参加する知識人の育成、2) 社会主義制度確立に寄与し得る研究活動の二点にある。

こうして、現在ビルマには、次の19の大学が設置されている。これら単科大学の大部分は、旧制大学の学部が独立したものである。

大 学 名	所 在 地	学 長	年限
1) ラングーン第一医科大学	ラングーン	ウー・バタン	7年
2) ラングーン第二医科大学	ミンガラートン	ウー・エー	7年
3) マンダレー医科大学	マンダレー	ウー・マウンマウンジー	7年
4) 歯 科 大 学	ラングーン	ウー・アウンタン	6年
5) 薬 科 大 学	ラングーン		
6) 工 業 大 学	ラングーン	ウー・ヨンモウ	6年
7) 経 済 大 学	ラングーン	ウー・エーフライン	4年
8) 教 育 大 学	ラングーン	サンミイン中佐	5年

9) 農業大学	マンダレー	ウー・タントウン	
10) 畜産獣医大学	インセイン	ウー・ターキン	6年
11) ラングーン文理科大学	ラングーン	ウー・マウンマウンカ	4年
12) マンダレー文理科大学	マンダレー	ウー・パトウ	4年
13) モールメン予科大学	モールメン	ウー・フランエ	2年
14) バテイン予科大学	バテイン	マン・テッサン	2年
15) マグウェー予科大学	マグウェー	ウー・ウィンマウン	2年
16) タウンデー予科大学	タウンデー	ウー・キンマウンティン	2年
17) ミッチーナー予科大学	ミッチーナー		2年
18) 労働者大学	ラングーン	ウー・チョー	
19) 夜間大学	マンダレー		

この内、ラングーン、マンダレー両文理大、教育大、5予科大の8校に、歴史学科または歴史学講座が設けられている。

2) 学会

1966年以降、「ビルマ総合学会」が開催されるようになり、毎年1回、農業、林業、医学、技術、工業、数学・物理学、化学、地質学、生物学、海洋学、社会学、言語・文学・文化の12部会に分れて、研究発表が行われている。今までに4回開かれた学会の概要は、次の通りである。

(第3回大会の詳細については、「東南アジア研究」vo.16 No.2, 1968 pp.181-190にて、「第3回ビルマ総合学会に出席して」と題して報告した。

開催期間	発表者数	出席者総数
第1回大会 1966.3.21-26	270	
第2回大会 1967.3.19-23	261	3,640
第3回大会 1968.3.18-23	275	4,340
第4回大会 1969.3.17-22	278	5,836

本年3月開かれた第4回大会の「言語・文学・文化部会」における発表者数は18人で、その概要は次の通りであった。

発表者	(所属)	論題
1) ウー・マウンマウンデー(ラングーン文理大)		ミヤゼディー碑文のモン語・ビルマ語の比較

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| 2) ウー・トゥンシュエ(ラングーン文理大) | モン語碑文にみられる意味不明の語彙 |
| 3) ドー・オンチー | ティーボー王時代の行政改革 |
| 4) ドー・キンキンセイン(ビルマ国史委員会) | パガン時代の司法制度 |
| 5) ウー・テインダン(文化省) | ビルマの暦 |
| 6) ウー・シュエトウイン(ラングーン文理大) | モン語の言語学的研究 |
| 7) ドー・ティンティンミン(ラングーン文理大) | シュエグーデー碑文パーアリ語の研究 |
| 8) ウー・イーセイン(陳 瑩 性) | 古代タイ・シャン族(最古からA.D. 220年まで) |
| 9) ウー・エーチョー(タウンジー予科大) | ビルマにおける民族教育運動史 |
| 10) ウー・ティンフラ(翻訳出版局) | ビルマ語の新造語彙 |
| 11) ドー・キンキンウー(ラングーン文理大) | カヤー州内民族の婚姻慣習 |
| 12) ドー・タンヌ(ラングーン文理大) | ビルマの親族呼称と諺 |
| 13) ウー・ソウリン(タウンジー予科大) | 英領ビルマ時代の仏教長老 |
| 14) ウー・タントウン(マンダレー文理大) | 古代モン語碑文にみられる史的資料 |
| 15) ウー・レーミン(ラングーン文理大) | パーアリ語論藏の歴史 |
| 16) ウー・ポンミン(ラングーン文理大) | フォー・カレン族仏教徒の文学史 |
| 17) ウー・セインマウンマー(考古学局) | ビルマにおける古代紋章 |
| 18) ウー・マウンセイン(文化省) | モン族の勇士とモン族の宰相 |
| 19) ナイ・パンフラ(文化省) | ラザダリ戦記 ビルマ語版・モン語版の比較 |

以上18編(ドー・キンキンウーが欠席したため)の発表の内、1) 歴史学関係の発表が9編で全体の半分を占めていたこと、2) モン語およびモン文化、モン民族史に関するものが6編で全体の3分の1を占めていたことが、本年の特徴であった。

なお、この「ビルマ総合学会」で発表された論文の内、人文科学系のものは、Tekkadoe Pinnya Padetha Sazaung、または、Union of Burma Journal of Literary and Social Sciencesに収録されることになっており、すでに前者は第4巻第4号(計16冊)、後者は第1巻第2号まで出版されている。共に、執筆用語は、原則としてビルマ語である。

阮 瑞 における志怪と伝奇

川 本 邦 衛

明の永楽年間からほぼ正統年間に至る間、中国では唐代伝奇の手法をついだ短篇小説が、甚しく世にもてはやされたが、その最初の作品である、瞿佑の「剪灯新話」の出刊の年は、ヴェトナムでいえば、藍山における黎太祖起義の三年目である。この小説集が、属明期を脱したヴェトナムに何時頃渡ったかを明らかにすることはできないけれども、黎朝ヴェトナムのある種の人々の間に、明人と同様にして、この種の小説が迎えられたらしいことは、阮秉謙の門下であった阮嶼（または阮嶼）に「伝奇漫録」四巻があり、それがかなりの評価を受けてきたことによって明らかであるといえるであろう。

「伝奇漫録」は、黎朝景興二十四年（1763）に柳幢社の阮碧の家刻本を重刊した、いわゆる「新篇伝奇漫録増補解音集註」と題する坊刻本によって知られてきたが、その成立年代、及び作者の経歴などが、なお詳らかになっていない。但し、そこに録されている二十篇の小説には、古くは李朝惠宗の建嘉年間の出来事を描いたもの（茶童降誕録）がある一方、最も新しいものとしては、黎の洪徳年間から端慶年間にわたる話（金華詞話記）があることから、従来行われてきたように、作者の父の阮翔縹が進士になった洪徳二十七年を一つの根拠として、その成立の年を推測するより、それが1510年以降のものであると推察することは、直ちに且容易に行われるべきであり、さらにまたいくつかの手がかりから、少くともそれが憲宗の景統年間以後に書かれた作品であるともいえるように思われる。

「伝奇漫録」が「剪灯新話」の色濃い影響から書かれていることは、夙に黎貴惇や潘輝注の指摘するところであり、それは例えば、〈木棉樹伝〉と「新話」の〈牡丹灯記〉を読み較べるだけで、誰しも否定し得ないことであろうが、なおまた両書がともに四巻から成り、一巻にそれぞれ五篇ずつ、合計二十篇の短篇を輯めているという、小説集としての体裁の類似も見逃せない。李禎の「剪燈余話」と同様に、そこに「伝奇漫録」をヴェトナムにおける「剪灯新話」の続撰書たらしめようとする、作者の明瞭な意図を汲むことも可能であると思う。しかも「剪灯新話」は、もともと永楽十九年、胡子昂が散佚していた「剪灯錄」四十巻の短篇を集めて出刊するときにはじめてこの形になっていることや、正統年間に英宗がこの種の本を禁止してから後、すなわち阮嶼の執筆の約六、七十年前から、本国では急速に足本が失われはじめ、やがて「百川書志」にその篇数が十一篇とされるようになってしまったことなどを考へると、篇数の完全な「新話」と同体

裁の続撰書をヴェトナム人が書いていることは、とりわけ興味のあることでもある。

しかしながら、以上の事柄などから、ヴェトナム人の間では、阮瑰の小説集と、明代の伝奇本との関係ばかりが、とくに強調されてきたきらいがないでもない。たしかに『木棉樹伝』と『牡丹灯記』についていい得ることは、『翠綃伝』と『翠翠伝』についてもいえるし、『昌江妖怪錄』、『陶氏業冤記』、『西垣奇遇記』などが、『牡丹灯記』の変形であり、『傘円祠判事錄』や『夜叉部師錄』が「新話」の『令狐生冥夢錄』から出てきたものであることはほぼ間違いない。しかし、胡季彥の乱にまつわる話として書かれた『翠綳伝』は、単に元来の張士誠の叛乱に題材をとった『翠翠伝』に通ずるものではなく、実は唐代の伝奇『章台柳伝』を作者が読み識っていなければ、決して書けなかつたものであると考えたい。『章台柳伝』は、『快州義婦傳』にも引かれているから、少くとも阮瑰がこの伝奇本に关心のあったことは明らかであろう。同様に、『伝奇漫錄』の二十篇中には、『幽明錄』、『柳毅伝』、『長恨歌伝』などや、あるいはそれ以前の六朝の小説の影響を受けて書かれたものが、少からずあるように見受けられる。むしろ阮瑰のこの小説集によって、一般に黎朝のヴェトナムの人士が、六朝の志怪や唐代の伝奇に対して、どれほど関心を払っていたかを測ることはできないであろうか。

東南アジアのイスラム化における港市の役割

長岡 新治郎

東南アジアのイスラム化の中で、最も多様でしかも典型的な経過を辿ったのはジャワのイスラムである。同島の北海岸には、初期イスラムの布教に預って力あつたスーナンと呼ぶ尊者の墓所^{スルターン}が各所にあり、現在でも巡礼に賑っている。彼等の多くは伝道者であるとともにまた地方領主としての性格をもっており、その出自はペルシャ、アラビヤなどであつたり、またマジャパヒットと姻縁関係者であつたりして、その尊貴性を誇っている。一方ポルトガル史料、とくにトメ・ピレスの『東方諸国記』によれば、海岸のイスラム領主の出自は奴隸であつたり、また商人であつたり一般的に卑賤のものである。ジャワはスマトラとは異って、政治的勢力が強かったので、イスラムの布教は、経済的な関係を通じて、権力と衝突することを避けて進行し、やがては地方領主と姻縁関係を結び、政治権力に接近し、ついには領主を追放して自らそれにとつて代るという場合もでてきた。政治の実権を握ったこれらのものはイスラム教徒としておのれの勢力圏を拡げてゆくため、当然聖戦の名の下にその布教を武力的色彩を帯びたものにした。それ故これらスー

裁の続撰書をヴェトナム人が書いていることは、とりわけ興味のあることでもある。

しかしながら、以上の事柄などから、ヴェトナム人の間では、阮瑰の小説集と、明代の伝奇本との関係ばかりが、とくに強調されてきたきらいがないでもない。たしかに『木棉樹伝』と『牡丹灯記』についていい得ることは、『翠綃伝』と『翠翠伝』についてもいえるし、『昌江妖怪錄』、『陶氏業冤記』、『西垣奇遇記』などが、『牡丹灯記』の変形であり、『傘円祠判事錄』や『夜叉部師錄』が「新話」の『令狐生冥夢錄』から出てきたものであることはほぼ間違いない。しかし、胡季彥の乱にまつわる話として書かれた『翠綳伝』は、単に元来の張士誠の叛乱に題材をとった『翠翠伝』に通ずるものではなく、実は唐代の伝奇『章台柳伝』を作者が読み識っていなければ、決して書けなかつたものであると考えたい。『章台柳伝』は、『快州義婦傳』にも引かれているから、少くとも阮瑰がこの伝奇本に关心のあったことは明らかであろう。同様に、『伝奇漫錄』の二十篇中には、『幽明錄』、『柳毅伝』、『長恨歌伝』などや、あるいはそれ以前の六朝の小説の影響を受けて書かれたものが、少からずあるように見受けられる。むしろ阮瑰のこの小説集によって、一般に黎朝のヴェトナムの人士が、六朝の志怪や唐代の伝奇に対して、どれほど関心を払っていたかを測ることはできないであろうか。

東南アジアのイスラム化における港市の役割

長岡 新治郎

東南アジアのイスラム化の中で、最も多様でしかも典型的な経過を辿ったのはジャワのイスラムである。同島の北海岸には、初期イスラムの布教に預って力あったスーナンと呼ぶ尊者の墓所^{スルターン}が各所にあり、現在でも巡礼に賑っている。彼等の多くは伝道者であるとともにまた地方領主としての性格をもっており、その出自はペルシャ、アラビヤなどであったり、またマジャパヒットと姻縁関係者であったりして、その尊貴性を誇っている。一方ポルトガル史料、とくにトメ・ピレスの『東方諸国記』によれば、海岸のイスラム領主の出自は奴隸であったり、また商人であったり一般的に卑賤のものである。ジャワはスマトラとは異って、政治的勢力が強かったので、イスラムの布教は、経済的な関係を通じて、権力と衝突することを避けて進行し、やがては地方領主と姻縁関係を結び、政治権力に接近し、ついには領主を追放して自らそれにとつて代るという場合もでてきた。政治の実権を握ったこれらのものはイスラム教徒としておのれの勢力圏を拡げてゆくため、当然聖戦の名の下にその布教を武力的色彩を帯びたものにした。それ故これらスー

ナンの伝承も、はじめは伝道的性格が濃くでているが、だんだん領主としての性格をそなへてくるようになるのはこのイスラム化の様相を反映しているので、その伝承の説話は伝道者と領主のそれを適当に接配し、さらに尊崇の念をもたしめるため、作為的に尊貴な系譜を作り上げたと考えられる。

16、7世紀東部ジャワの港市グリッジに近い丘の上に本拠をもったスーン・ギリ(Soenang Giri)は、伝道の権威と世俗的権力をもち、同地を中心とした領主として、他のスーンに比して最も永く続いたスーンであった。これはマジャパヒット王国を没落させたイスラム連合勢力の一翼を担ったが、イスラム内陸国家デマやパジャンの強大化とさらに、それらを吸収した新興マタラム王国の勃興によるジャワ統一の機運の中で、その政治的権力を奪取され、ただ単にイスラム弘布の祖としての虚名を擁するに過ぎない存在となってしまった。その上17世紀になってオランダ東インド会社が、モルッカ諸島をはじめいわゆる香料群島において、香料の独占権を握り、ジャワの海岸の港市が商業権を喪失するや、経済的な基盤まで崩壊するにいたった。スーン・ギリは往時の栄光の回復を計り、オランダ東インド会社とマタラム王国両者の間に立って政治的術策を弄したが、1680年一族ごとくマタラムの包囲下に玉碎した。こゝにおいてジャワにおけるイスラム都市は消滅したが、その時にはマタラム王国自身でさえ国内の動乱により、そのジャワ統一は挫折し、さらに東インド会社からも海上権を奪回できず、結局会社に援助を求め、その戦費の担保として北海岸の地を会社に提供したうめついにその一部をも会社に割譲せねばならぬ事態を招き、一路植民地化への道を辿った。しかしギリの滅亡後、それに従っていたイスラムの法家や教師などの一部は、イスラム国家の体制を整えようとするマタラムの宮廷に重用され、支配層に接近していったが、それとともに、大部分のものはジャワ村落の中に分散し、イスラムを一般民衆の中に拡げたのである。かくてスーン・ギリの滅亡はジャワのイスラム化に一つの転機となった。

東南アジア史の興味

——新会長就任あいさつ——

松本信広

我国の東洋史は19世紀の末葉日本の北方大陸に対する干渉時期から擡頭して来たと云われる。第二次世界大戦によって北方大陸が日本の容易に近づき難い領域となると我国の経済的活動の舞台は東南アジアに移った。これらの国々の大部分は今まで欧米諸国の植民地となっており、その

ナンの伝承も、はじめは伝道的性格が濃くでているが、だんだん領主としての性格をそなへてくるようになるのはこのイスラム化の様相を反映しているので、その伝承の説話は伝道者と領主のそれを適当に接配し、さらに尊崇の念をもたしめるため、作為的に尊貴な系譜を作り上げたと考えられる。

16、7世紀東部ジャワの港市グリッジに近い丘の上に本拠をもったスーン・ギリ(Soenang Giri)は、伝道の権威と世俗的権力をもち、同地を中心とした領主として、他のスーンに比して最も永く続いたスーンであった。これはマジャパヒット王国を没落させたイスラム連合勢力の一翼を担ったが、イスラム内陸国家デマやパジャンの強大化とさらに、それらを吸収した新興マタラム王国の勃興によるジャワ統一の機運の中で、その政治的権力を奪取され、ただ単にイスラム弘布の祖としての虚名を擁するに過ぎない存在となってしまった。その上17世紀になってオランダ東インド会社が、モルッカ諸島をはじめいわゆる香料群島において、香料の独占権を握り、ジャワの海岸の港市が商業権を喪失するや、経済的な基盤まで崩壊するにいたった。スーン・ギリは往時の栄光の回復を計り、オランダ東インド会社とマタラム王国両者の間に立って政治的術策を弄したが、1680年一族ごとくマタラムの包囲下に玉碎した。こゝにおいてジャワにおけるイスラム都市は消滅したが、その時にはマタラム王国自身でさえ国内の動乱により、そのジャワ統一は挫折し、さらに東インド会社からも海上権を奪回できず、結局会社に援助を求め、その戦費の担保として北海岸の地を会社に提供したうめついにその一部をも会社に割譲せねばならぬ事態を招き、一路植民地化への道を辿った。しかしギリの滅亡後、それに従っていたイスラムの法家や教師などの一部は、イスラム国家の体制を整えようとするマタラムの宮廷に重用され、支配層に接近していったが、それとともに、大部分のものはジャワ村落の中に分散し、イスラムを一般民衆の中に拡げたのである。かくてスーン・ギリの滅亡はジャワのイスラム化に一つの転機となった。

東南アジア史の興味

——新会長就任あいさつ——

松本信広

我国の東洋史は19世紀の末葉日本の北方大陸に対する干渉時期から擡頭して来たと云われる。第二次世界大戦によって北方大陸が日本の容易に近づき難い領域となると我国の経済的活動の舞台は東南アジアに移った。これらの国々の大部分は今まで欧米諸国の植民地となっており、その

歴史も本国の植民史の中に繰込まれていた。こういう国の中には現地の碑文や文書も読みほどき、被治者に代ってその歴史を編述したものもいた。しかし戦争は東南アジアを変貌させ、植民政府は何れも本国に引上げてしまい、その研究機関は、中絶し、とてかわった現地民族も未だゆっくりその文化の研究などに従事出来ぬのが現状である。

東南アジア史が私共に与える興味は、それが古代と中世との様相を具え、近代文化の奔流にまきこまれ、至る所に応用人類学その他の科学的診療を必要とする不調和をくりひろげていることである。たとえば小乘仏教国では中世的な僧院が近代的なネオンや扩声器で布教につとめているが、僧侶達は昔ながらの托鉢姿で通りすがりの外国人の車に便乗しなければ近所の僧院との間の交通も出来ぬ状態にある。こういう不調和の最も強くあらわれたのはベトナム、ラオスにおける無益な殺戮戦であり、マライ半島における苛烈な人種衝突であろう。

吾々の今日東南アジアでしなければならぬことは、その民族の歴史、言語、社会などを諒解し、彼等の時間的に鈍いテンポを急激な近代化の速度に調和させ、彼等をしてスムースに脱皮せしむることにある。今日東南アジアに於ける対立、抗争、民族的相剋は、或程度まで話合いや文化工作で防止なし得るものではなかろうか？

歴史の研究は今日の東南アジアの事情を解明する一つの鍵である。此地の古代と中世とは我々にとって似かよったものがある。両方とも稻作文化の基盤の本に育った王政から発展し、同じ仏教でその中世的伝統を培ったのである。そういう基層文化の類似面を研究し、彼等をしてその伝統文化の歴史に興味を抱かせ、文化の類似から来る連帯感を育成させ、此地域の知識層の相互の融和をうち建てることは平和樹立への一助となるのではなかろうか？

今日イギリス、フランスの政治的勢力は後退し、アメリカまた背を向けんとしている時、日本の製品は巷に氾濫し、東南アジア人の心を知らぬ日本商人は進出跳梁してその傍若無人の行状が心ある人々の眉をひそめさせている。

経済的利益の一部をさいて日本は東南アジア民族がお互いを了解し、融和するよう精神的な協力をはかる義務がある。かっての植民政策にとってかわるべくフランスがニースとパリの大学に新設した民族相互関係研究所 *Institut d'Etude des Relations Inter-ethniques* の如き施設は我国に於ても是非必要である。そういう機関に於て第一に着手すべきことは東南アジアの歴史的研究であり、地的環境や民族性を含め、住民の現実を十分配慮した科学的な分析を促進しなければならぬことは云々までもない。

岸幸一氏を悼む

岸先生のこと

森 弘之

岸幸一先生の急逝を知らされた時私の胸は突如真空と化し、それが何を意味するのかが判るまでに永い時間を要したが、それから悲しみとも驚きとも筆舌に尽せぬものが私を襲ったのであった。

1958年に東大教養学部から文学部東洋史学科に進んだ私はインドネシアの歴史をやることに決めて東洋史学研究室を根拠としていた「南方史研究会」に出席し先学諸氏から学ばせていただくなようになったのだが、ことに岸先生は、デサの問題に興味をもった私にアメリカ人による実態調査についてくわしく説明して下さりさらに *Adatrechtbundels* と比較することによってデサの変化を考えてみたらどうかと示唆されて、私の研究に一つの方向を示して下さったのである。それ以後研究会・学会や共同研究など公けの機会だけでなく研究所に（それ以前の国会図書館にも）お邪魔しては知識を与えられつづけた私にとって、学問的吸收の対象であるばかりでなく、その温顔に接するたびに人間的な暖かみに包まれるのが常であったという点でもまた、本当に先生と呼ばせていただくにふさわしい方であった。

インドネシア研究において先生の目された領域として①『インドネシアにおける日本軍政の研究』に代表される日本占領期を中心とするインドネシアのナショナリズム研究、②これとの関連から C. Geertz や R.R. Jay らのジャワにおける実態調査および彼らの出した *abangan santri prijaji* 仮説の紹介、③最後に目指されたインドネシア人社会ことに村落共同体へのアプローチ——その一つの結実が「ジャワの村落組織についての覚書——デッサとカルラハンについて」（『東洋文化』43号）であった——の大きく分けて三つが考えられるのではなかろうか、というのが私の見方である。

1967年4月から半年間東大文学部において講師として「インドネシア近代史」の題目で講義されたが、これはインドネシア社会が19世紀オランダ統治下で大きな変動を迫られ20世紀に入り独立するまでの時期を概観したものだが、前記の研究諸領域の蓄積を六ヶ月の講義に凝縮したような充実したものであり、とくにデサに対するオランダの政策を追いかながらその変化を考えようとした点に教えられるところ大なるものがあった。蛇足で恐縮ながら、1967年10月から文学部助手となった私にとっては大学院生として最後の授業であったことも忘れがたい。

先生のご冥福をお祈り申し上げる。

岸さんを偲んで

高橋保

昨年11月に急逝された岸(幸一)さん(あまりの親しさによる甘えから、私などは生前いつも岸さんとお呼びしていたので、ここでもそり呼ばせて戴く)には、同じ当学会に属する東南アジア史学徒の先輩として、またとくに職場も同じアジ研(アジア経済研究所)に属していたことから、日常よく御指導を戴いた。

若干専門の対象地域が異っていたが、岸さんは専門のインドネシア研究のみならず、広く東南アジア全域についての研究・資料事情については抜群の深い学殖を持たれており、それが岸さんを初代アジ研図書資料部長たらしめた所以でもあったのであるが、私なども随分その恩恵を蒙らせて戴いた。研究所入所早々から、時々私の机の上に未だ知らなかつたインドシナ関係の新刊書や該当個所をチェックした雑誌や新聞が黙って置かれていることがあつた。読んで参考にするよううにとの岸さんの温かい親心であった。

岸さんはまた多くの欧米アジア学者と親交をもたれており、我々にもよくそういう学者諸先生方を紹介して親しく懇談する機会を作つて下さつた。寡黙を以て知られる岸さんがあんなに多数の欧米学者と親交をもたれていたということは、これ一に岸さんの温厚な人柄により、また一つには真摯な学者としての共感によるものと思われるが、今以て私には不思議に感じられることの一つである。

岸さんは平常は学問研究においても其他の業務面でもつねに細かく神経の行き届いた方であつたが、その反面、好きな酒を飲み興到れば忽ち裸になって本場仕込みの正調パンガワンソロを独唱されるというような一面も持たれていた。

インドネシアに永く生活し、インドネシア語を自由に話し、眞に現地感覚を生かしたインドネシア研究を推進されてきた当該地域研究のパイオニアであった岸さんが、死の2日前までインドネシアに滞在し、ついにインドネシアの発展と日・イ協力推進のために身を捧げられることになつたのも、何か岸さんとインドネシアを結ぶ深いえにしを感じさせられてならない。今は只心から御冥福をお祈りするばかりである。

岸さんのこと

永積昭

ライデンの仮住居を訪ねて来たベン・アンダースンが、数日前アムステルダムの戦争記録研究所で、キシに会ったよ、と言う。インドネシアの専門家が言うのだから、岸幸一氏のことにつきまっている。どんな風でした。面白いのさ。男のようにいかつい所長のヨーストラが突立っている前で、カバンから何か書類を出してみせようとして、のぞき込んで探すが、紙きれが際限もなく出るばかりで、目ざす書類は出ないんだな。彼は女の子の様に照れて、顔をくしゃくしゃにしてなおもカバンをひっかき廻して、気の毒に、あんなおとなしい人だから――

ベンの絶妙の演技。私は一瞬そこにうずくまる彼に、まさまで岸さんを見て、笑いかけたものだが、考えてみれば、岸さんの当惑の原因は他にもあったかも知れない。戦争中のインドネシアをご存じの岸さんにとて、オランダの、わけても日本軍のもとで捕虜生活を送った人達を歴訪しながらの資料調査では、気疲れなされることも多かったろう。向うは決して過去を多く語りたがらない、だから余計つらい、と言われたこともある。そういうデリケートな方だった。

あれから六年たつ。今も眼をつぶると、岸さんは必ずカバンの脇にかづみ込んで、照れくさそうにそっぽを向きながら、あとからあとから紙片を取り出される姿で見えて来る。つきることのない情報。むろんあれはカバンではない。岸さんの知恵袋から直接ほとばしり出るのであった。紙片は机に溢れ、床にこぼれ、私は花吹雪の様に新知識を浴び、やがて、ふがいなくもそれを忘れるのだ。

惜しい方を失った悲しみで一ぱいである。

委員会報告

1. 会長候補者選考委員会委員選挙の結果について

昨年秋の大会前に実施した上記の選挙の結果、次の7氏が当選した。

生田 滋、岩生成一、河部利夫、白鳥芳郎、竹田竜児、
松本信広、山本達郎

2. 会長選出ならびに新役員について

会長候補者選考委員会の選考にもとづき総会において、新会長に松本信広氏が選出された。

また、新役員とその職務分担は次の通りである。

涉 外 竹田竜児、大沢一雄

庶務・会計 近森正、中塚発夫

会 報 高橋保、永積昭

機関誌(準備) 山本達郎、白鳥芳郎、伊東照司

3. 連絡事務所の移動について

庶務の事務所は当分下記の通りとする。

東京都港区三田2の2 慶應大学文学部東洋史研究室 気付 (453) 4511 (代表)

なお、会費の払込みについては、従来の口座と同じである。

東京 59721 東南アジア史学会

ただし、現金については慶應大学で扱う。

4. 例会の開催について

例会については、今後当分月例とはせず、適宜、発表者等を定めて開くこととした。

発表の希望あるいは例会の企画・運営等について出来るだけ会員諸氏の御意見、御協力を
お寄せ頂きたい。

5. 45年夏季大会のシンポジウムについて

今年の夏季大会は、例年通り開催する予定である。その際シンポジウムを行なうことにつ
いて、2月13日例会席上、下記のテーマ案が出た。これについての会員諸氏の御希望、
御意見もぜひとしとお寄せ頂きたい。

イ. ヒンドゥー化の問題

ロ. 農村の変質

ハ. 都市の成立

ニ. ヒンドゥー化と中国化との差の問題

ホ.. 基層文化の問題

ヘ. ソフト・カルチュアとハード・カルチュア

ト. 宗教と政治権力

チ. 言語と社会階層

(いずれも東南アジアに関する)

昭和43年度会計決算報告

(昭和43年11月1日～昭和44年10月31日)

A. 収入の部

会員会費収入	99,823
利 息 収 入	566
寄 附 金	10,000
雑 収 入	2,719
前年度繰越金	35,744
合 計	148,852

B. 支出の部

大会運営費	37,470
会報刊行費	54,605
研究会運営費	7,400
選挙費	6,350
委員会費	12,400
名簿印刷費	2,000
事務運営費	20,455
合 計	140,680

C. 差引残高

148,852
- 140,680
8,172

◎会費納入についてのお願い

本学会は、会員の会費のみによって運営しておりますため、皆様の会費納入が遅延されたり致しますと、会務の運営に支障がおこります。試みに会費未納率を算出致しますと、次のような数字となります。本学会の44年度とは、昭和44年11月1日～45年10月31日の間ですが、このままでは円滑な運営も危ぶまれる状態ですので、未納の方は早急にお納め下さるようお願い致します。ことに現在機関誌の刊行を準備しております点も御考慮の上、ぜひ御協力下さるようお願いします。

会費未納率 (44.11.28 現在)

42年度分	12%
43年度分	32%
44年度分	51%

新刊書
ベトナム関係

- Bonnet, G. : La Guerre Révolutionnaire du Vietnam. Paris, 1969. (Payot)
- Devillers, P. & Lacouture, J. ; End of a War: Indochina 1954. New York, 1969. (Praeger)
- Warbey, W. ; Ho Chi Minh and the Struggle for an Independent Vietnam. London, 1969. (Merlin Press.)
- Osborne, M.E. ; The French Presence in Cochinchina and Cambodia. Rule and Response. Ithaca, 1969. (Cornell University Press.)
- Chaliand, G. Les Paysans du Nord-Vietnam et la Guerre. Paris, 1968. (Maspero)

タイ関係

- Evers, H.D. (ed.) ; Loosely Structured Social Systems: Thailand in Comparative Perspective. (Southeast Asia Studies, Cultural Report Series. No. 17.) New Haven, 1969. (Yale University Press.)
- Wenk, K. ; The Restoration of Thailand under Rama I, 1782 - 1809. Tr. Greeley Stahl. Tucson, 1968. (University of Arizona Press.)

ビルマ関係

- Butwell, R. ; U Nu of Burma; A Reissue, with a New Chapter Covering 1962 - 69. Stanford, 1969. (Stanford University Press.)
- Trager, H.G. (ed.) ; We the Burmese: Voices from Burma. New York, 1969. (Praeger)
- Maung Maung, Burma and General Ne Win. Bombay, 1969. (Asia Publishing House.)

(高橋保記)

編集後記

今まで会報の編集に当られた仲田浩三氏が古代ジャワ碑文の研究のため、インドネシアに留学されたので、高橋保、永積昭の2人が会報編集の事務を引継ぐことになった。

秋季大会に引続いて、会員岸幸一氏逝去の報に接し、私共一同或る虚脱感に襲われており、思わずも会報の出版がおそくなつたことを、心からおわび申し上げる。

(永積昭)